関西自然保護機構会報 *20*（*2*）：*115－120, 1998*

環境教育のはじまりに必要なもの
－ものそのもの，ことそのことを大切にする－

京都大学大学院人間・環境学研究科　岡　田　美恵子

COMPREHENSION OF LIFE

Mieko OKADA *Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University*

はじめに

環境問題を考える際には，自分以外の「いのち」に配慮することが求められる。しかし，環境に関わる情報だけで（環境に対する）姿勢や態度変化をもたらすことはできず，内にある概念，考え方を変化させることではじめて態度変化が可能になる（Atchia 1994,（　）部著者注）。本稿では，日本人が近しい人の死から生じる喪失感を伝統的にどう受容してきたか，短歌表現等を例に示した。自然科学の立場で客観視すれば「死者」は故人と関わりを持った人に残る「過去の事実の記憶」にすぎない。しかし，死が日常に存在しない現在において，あまりに簡潔な死の認識は，死の理解の希薄さを招く危険がある。それを回避するために，「いのち」に対する惜別の情を育む必要性を述べた。この考えを支える思想として死者を悼むことと人を愛することは同義であるということを万葉集の事例から紹介した。そして，Atchia（1994）のいう環境に対する態度変化につなげるための環境教育のありかたとして，子どもたちの情緒的な発達を考慮しつつ，死の認識を生への理解に取り入れるべきとの意見を述べた。

京都大学の福原達人氏と加藤朗子氏には，まとまりの悪い初期の草稿を読んでいただき助言をいただいた。琵琶湖博物館の布谷知夫氏には原稿の構成に助言をいただいた。お礼申し上げます。本稿の英題はサン＝テグジュペリの「星の王子さま」（岩波書店）より引用した。原文のフランス語は，Comprenons la vie. であるが，訳者の内藤濯氏はこの一文を副題に示したように意訳された。

科学的な死と伝統的な死

人は「いのち」の意味についていつ考えるのだろうか。結論からいうと，他者の死に接したときだと考える。人は近しい人の喪失と，それによって生じた心もとなさとに向き合う中で「いのち」の意味について考える。私は科学的な知識で「死は無に帰することである」と理屈で納得している。しかし，いざ他者の死に向き合わされたとき，ある矛盾が生じ私を困惑させた。人は死ねば無になるにもかかわらず，故人に呼び掛けるとき暗に何らかの形でその存在を認めているのである。いったい死者とはなんなのだろうか。

日本では，亡くなった人は住み慣れた我が家をでて山にはいって行くという信仰をもっていたと考えられている。確かに万葉集をみると山という単語が多くみられるし，魂の比喩として雲があらわれている（青木, 1984）という。そんな信仰の伺える挽歌を二首，万葉集から抜き出してみた。

こもりくの泊瀬（はつせ）の山に霞立ち

たなびく雲は妹にかもあらむ

作者不詳（巻7．1407）

訳：初瀬の山に霞が立ち，たなびく雲は妻であろうか

青旗（あおはた）の木幡（こはた）の上を

かよふとは目にはみれども

直（ただ）にあわぬかも

倭姫王（巻2．148）

訳：樹々が青く繁っている木幡の山の上を，あの方の魂が通っているのは目に見えるのに，じかにお会いするのはかなわないことなのだなあ

私たちは伝統的に「生者の世界」と「死者の世界」とを対置して考えてきた。一方，自然科学の見方では「死は無に帰することである」のだから，「生者の世界」に対置すべき世界は存在しない。倭姫王の天智天皇に対する挽歌の内容は，現代の立場からいえば虚構である。「死者」は故人と関わりを持った人に残る「過去の事実の記憶」でしかないのである。そのことを私たちは知ってしまった。死による近しい人の喪失そのものに加え，伝統的な「死者の世界」の喪失をも認めることは，人をさらに深い悲しみに追いやってしまう。そんな感情を詠んだ，斎藤茂吉の短歌を一首あげる。

遠天（おんてん）を流らう雲にたまきわる

命は無しと云えば悲しき

斎藤茂吉「赤光」（1913）

「たまきわる」という言葉は「いのち」にかかる枕詞である。万葉集は茂吉がその作歌のはじめから晩年にいたるまで，規範となり，影響を受けた歌集である。しかし，神経科の医師であった彼は，万葉集の時代との距離を否応なしに自覚していたのだろう。富家恵海子氏の著書「院内感染」（1997）の中にも，上の短歌と重なる心情の記述があるので同様に引用してみる。

テニスコートの上に拡がった鰯雲の間から，「あんたは相変わらずヘタだね」と夫がニヤニヤしているような気がして，思わず雲に向かって手をふってみる。－中略－このようなコミュニケイションは，ふと我に返った時，哀しく空しく心がヒヤッとする。

現代は信仰の世界に住むことなしに生活を処理していかなくてはならない時代である。けれど，近しい人の喪失にともなうこころもとなさは，明快で単純な科学の言い分では解消しない。一方，多くの宗教は死に対する一定の考えを示し，そこから生き方を示してはいる。宗教は主観の共有であるから，そこに身を沈めることができればある種の納得は得られるであろう。しかし，客観を重要視する現代にあってはそれも難しい。自然科学は死の概念は示しても，そこから先の文化としての価値観にまでは気を配っていない。斎藤，富家両氏の「かなしみ」は，人間の生と死をつなぐ価値観の不在にゆえに，よりやるせないものになっているようにおもわれる。

ところで，万葉集には以下のような歌がある。

世間（よのなか）はまこと二代（ふたよ）は

ゆかずあらし

過ぎにし妹に逢わなく思へば

作者不詳（巻7．1410）

訳：人間の一生というものは本当に二度はめぐってこないようだ。亡くなった妻に会わないことを思うと。

うつそみの人にある吾や明日よりは

二上山を兄弟（いろせ）とわが見む

大伯皇女（巻2・165）

訳：現世の人であるんだこの私は。明日からは二上山を弟として私は見つづけよう。

この二首からは，「人生は本当に二回は繰り返せないんだ」，「私はまぎれもなくこの世の人なんだ」という深い認識が感じられる。短歌は人の喜怒哀楽という情動が直接に表現されたものではな

い。人の情動が短歌という形をとるためには，自分の感情を冷静に判断し洗練された表現にする過程が必要である。この過程は人の脳の働きによってなされる。生物学的に言えば，感情や記憶をつかさどる大脳辺縁系から発せられる強い情動を，言語や思考の中枢である大脳新皮質で理性の篩にかける行為が作歌であるといえるだろう。上記二首が示す，信仰が中心にある社会の中に生きながらも，個人の営みとしての思考の深さに，私は人間の可能性を感じる。

ここでもう一つ，現在では死が日常には存在していないということを考えなければならない。人が死ぬ瞬間を看取れることはまれであるし，死体は専門家によって処理される。私自身人の死に立ち会ったことはない。そのような状況で「死者」を「過去の事実の記憶」とあまりに明快に認識すること（あるいはさせること）は，死を希薄なものにしてしまうかもしれない。哲学者のJankelevitch（1978）は，人間にとっての死を「一人称（わたし）の死」，「二人称（あなた）の死」，「三人称（誰か知らない人，他人）の死」とに分けて考察し，人は「二人称（あなた）の死」を通して限りなく近い「一人称（わたし）の死」を体験すると述べた。人間は自分が死んだときはこうだったと実感することはできない。できないからこそ，自分の死をうつす鏡として他者の死が重要になってくる。ただし，他人事としての死や抽象化された死は鏡としての意味を持たない。「二人称（あなた）の死」を通して限りなく近い「一人称（わたし）の死」を考えることの大切さは色褪せることはないであろう。私たちは「死者」が「もの」として存在しないものであると知ったとしても，過去に確かに存在した「こと」として大切に思い返す感情を，育まなければならないと考える。そこから，死をめぐる現在なりの価値観が生まれるのではないだろうか。

「悼む」ことと「愛する」ことは同義である

万葉集において挽歌的性格を持つ歌を挽歌部以外から摘出することは容易ではないという。青木（1984）によれば，数多い相聞歌のなかには挽歌が存在しているかと思われるが，死葬に関した挽歌本来の内容をもたぬかぎり，相聞歌と挽歌にその抒情の質に差異がなく，歌詞自体からは見分けがつかないから，だそうだ。この記述を読んで思い出した一首がある。

天雲のたなびく山の隠りたる
　　吾が下ごころ木の葉しるらむ
　　作者不詳（巻7・1304）

訳：雲のたなびいている山が隠れて見えないように，外に出さないでいる私の心の奥底を，木の葉だけは知っていてくれるでしょう

この歌の前後の歌は相聞に通じる内容を持ち，相聞の部立てではないものの，恋の歌を集めた意図がみえる。注釈書（青木ら，1976; 澤瀉，1960; 鶴，1972）では木の葉を恋人に喩えていると解説している。しかし，永井路子氏(1979)と土屋文明氏(1951)は，木の葉を相手に喩えると変な言い方になり，素直に木の葉と解釈すべきではと述べている。この歌は「木に寄する」と題されている。木は人の心を解するものと考えられていた。永井氏はこの歌を，孤独な思いの深まった片恋の歌として紹介している。－私の気持ちは誰も知らない。山の木の葉しか知ってくれていない。－たしかにこう解釈する方が，残されたものの感慨をより深く伝えるように思う。私はさらに，この歌に挽歌的なものを感じる。死者を悼む気持ちを表面に出すことは，かえって他人の言葉で，それが慰めであったとしても，より心を傷つけられる危険をともなう。だから，作者は気持ちを隠し，人の心を解するという木にのみ感情を吐露したのではない

か。巻七には作者も作歌状況も記されていないものが多く，物語のように人々の間に伝わってきた歌を集めたものではないかと解釈されている。したがって，さまざまな状況に重ねあわせることが容易な歌が多い。しかし，相聞も挽歌も同じ感情の基底を有している事実が，私の解釈を許してくれるのだと思う。

悼むことと愛することは同義である。ただ，人は昔から死に対して恐怖と嫌悪の感情を持ってきた。そのことが，日常の中から悼むという感情をも締め出すのかもしれない。けれどいずれ死ぬものとしての「いのち」への惜別の情から，人や自然界の「いのち」を美しいものと理解することは意味があると考える。そうした感情が自然環境に対する価値判断や態度にも微妙な違いをもたらすのではないだろうか。

作家が自然科学者に突き付けたもの

私自身が，ある程度の年齢を重ねたからであろう，人の死に接することが多くなった。その経験を通し，とかく感情が深く沈みこむことは負の方向として暗く否定的にとられがちであるが，明るい方向だけに進んでも人の心に関わる本質には迫れないと感じるようになった。個人的な体験から物事を考えるとき，そこに一般性があるか常に自問しなければならなず，研究者見習いの私にとってこの姿勢はさらに重要であると自覚している。しかし，個人的な日常の中にこそ思考の種子があると考える。さらに作家の柳田邦男氏は著書の中で，「現代人の死は，しばしば個人の営みの範囲で終わることなく，それ自体のなかに社会的な意味がこめられている」とよく述べている（例えば，柳田, 1995)。加えて，近しい人々の死から生じる感情を，社会的な拡がりの中で考えることが，その後も生きる者の亡くなった方へ示せ得る，愛情なり尊敬であると思う。

石牟礼道子氏には「水はみどろの宮」(1997a) という作品がある。本書はメルヘンであり，そこにえがかれた内容は阿蘇山周辺の山岳地帯の自然と，草の声や水の声を聴く少女であり，彼女をとりまく犬や猫である。私は最初とまどいを禁じ得なかった。本作品は「苦海浄土－わが水俣病」(石牟礼, 1972)の凄惨の色が漂った文章表現とは対照的に美しい表現にあふれている。長年，水俣の惨状を見続けた人が，どうしてこうも光に満ちた作品がかけるのかといぶかしく思った。しかし，本稿を書きすすめるなかで「苦海浄土」と「水はみどろの宮」は「水俣のこと」を挟み同じ思考の軸の右と左に乗っているのではないかと思い至った。「苦海浄土」が挽歌とすれば，「水はみどろの宮」は自然に対する相聞歌なのである。絶望をくぐらないところにほんとうの優しさはないという教育学者の林竹二（1991）の言葉がそこには形としてあった。

石牟礼氏はこの作品に向かう原動力の一つとして，文学の世界でしか日本人の感性を蘇らせることはできないという思いがあった (1997b) と語っている。この言葉に対し，私はいまは返す言葉をもたない。けれど，石牟礼氏の言葉に反応できないと考えているわけではない。「水はみどろの宮」には多くの植物の名が出てくる。私がそれらの名から，少女を飾る花冠や少女をとりまく風景の様を思い浮かべることができるのは，まぎれもなく教育による。私は知識は感性を助けるという関係を信じたい。外界から刺激をうけそれに応答することが生物としての生き方のようである。さらに，人は人間同士の交流だけでなく，音楽や絵画，書物からも刺激をうけることができる。それらはときに生きた人とのふれあい以上に，思慮深い刺激を与えてくれる。教育の果たす役割はこれらと同質のものでなければならない。

教育の役割

子ども時代の原体験が極度にせばめられている現代，教育の果たす役割は大きいと思う。環境教育では，問題に対する知識と解決に向けた想像力による知的な作業はもとより，それ以前に問題を自分につながることとして受け止める感受性をはぐくむことが目標となる。私は環境教育のはじまりに必要なのは，死の認識を生への理解に取り入れることだと考える。しかし，子どもに人生の暗部である死をみせることは配慮に欠けることと非難されるかもしれない。人が死の意味をどの年齢で，どのように理解するかについての研究はほとんどない（Easson, 1982）。また，神谷（1974）は実際の子どもを観察して見ると，幼い時代ほど感情はひとかたまりにもつれあっていて，ことは決してそれほど秩序だってはいないと述べている。子供というものの理解には，まだ多くの研究を待たなければならないのかもしれない。ここではごく大まかな，子どもの感情の発達段階の心理学的枠付けを以下に示した。

2－5歳までの幼児は例外なく，自分は永遠に生き続けることを信じ，生活は喜びと無限の幸せのために作られていると感じる，楽天性をもっている(Chukovskii, 1970)。しかし，死をひどくこわがり，おびえるという感性も十分持ち合わせている（Chukovskii, 1970)。

就学年齢に達するころには，自分の周りの世界から，情報を学んで身につけていく能力が急速に発達する。このころの子どもも自分がいつか死ぬことは知っている（Easson, 1982; 麻生，1991）が，なおも守られて安心であると信じている（Easson, 1982)。9－10歳になると子どもは死を現実的にみるようになる（Nagy, 1948; Easson, 1982）という。

これをみると，子どもは大人が思う以上に知的能力を有しているように思う。「いのち」を理解することは，生きものは「いのち」を持つと知り，自分以外の「いのち」との交流を楽しいと感じ，「いのち」は失われるものでありと知り，失われた「いのち」を思い悲しみを感じることではなかろうか。子どもが人の死を理解していく，あるいは自らの死を意識する過程を考慮し，死の認識を生への理解に取り入れる教育のとりくみの必要性を感じる。

おわりに

私の所属する研究科は，人間と環境を全体的にとらえるべく，専門科目だけでなく，文化や価値意識に関わる授業科目も受講することになっている。本稿は，環境構築論（田中喬教授，講義内容：人が死ぬ場所としてのホスピス）と日本文化論（薗田稔教授，講義内容：宗教文化と環境問題）の講義をよりどころとして出発した。

引用文献

青木生子. 1984. 萬葉挽歌論. 437pp. 縞書房, 東京.

————ら校注. 1976. 万葉集一. 430pp. 新潮社, 東京.

————ら校注. 1978. 万葉集二. 526pp. 新潮社, 東京.

麻生　武. 1991. 内なる他者との対話. 39-91. 無藤隆編 言葉が誕生するとき. 336pp.新曜社, 東京.

Atchia, M. 1994（中山和彦訳）. 環境教育とは何か. 環境教育, 3; 2-3.

Chukovskii, K. 1958（樹下節訳, 1970）. 2歳から5歳まで. 422pp. 理論社, 東京.

Easson, W. M. 1981（大阪府立看護短期大学発達研学書究グループ訳, 1982）. 死にゆく子ども,

166pp. 医院, 東京.
林　竹二. 1991 教育の根底にあるもの. 173pp. 径書房, 東京.
石牟礼道子. 1972. 苦海浄土－わが水俣病(講談社文庫). 330pp. 講談社, 東京.
————. 1997a. 水はみどろの宮. 229pp. 平凡社, 東京.
————. 1997b.「私自身がいちばん遊ばせてもらったのかもしれません」. 月刊百科, 422:63-65.
Jankelevitch, V. 1966 (仲沢紀雄訳, 1978). 死. 514pp. みすず書房, 東京.
神谷美恵子. 1974. 心の旅. 232pp. 日本評論社, 東京.
加藤周一編. 1993. 近代の詩人 3 斎藤茂吉. 381 pp. 潮出版社, 東京.
永井路子. 1979. 万葉恋歌(角川文庫). 212pp. 角川書店, 東京.
*Nagy, M. H. 1948. The Child's View of Death, Journal of Genetic Psychology, 73:3-27.
澤瀉久孝. 1960. 萬葉集注釋 巻第七. 387pp. 中央公論社, 東京.
土屋文明. 1951. 万葉集私注 4 . 516pp. 筑摩書房, 東京.
富家恵海子. 1997. 院内感染(河出文庫). 235pp. 河出書房新社, 東京.
鶴　久, 森山　隆編. 1972. 万葉集. 641pp. 桜楓社, 東京.
柳田邦男. 1995. 犠牲－サクリファイス. 253pp. 文藝春秋 東京.

*直接参照できなかった。